

英語教育「早ければ効果が出る」は幻想？ 小学生の学びで大切なこと

有料記事

篠健一郎 2023年2月15日 9時07分

コメントプラス

蟹江憲史さんなど 2件のコメント



米ペンシルベニア大学のバトラー後藤裕子教授 = 大学のホームページから

小学3年生から「外国語活動」として英語を学ぶことが、2020年度実施の学習指導要領に盛り込まれました。ただ、1年生から英語の授業がある自治体もあります。

英語は早く学んだほうが良いのか。外国語習得や言語教育に詳しい、米ペンシルベニア大学のバトラー後藤裕子教授に英語の早期教育の効果や注意点を聞きました。

根強い「ネイティブ神話」

——英語はいつから学び始めると良いですか。

何歳から学ぶと良い、という決まった答えはありません。

生活の中で英語を使う第二言語環境では、年齢がある程度関係します。特に発音は、早く学んだほうがいわゆるネイティブに近くなるでしょう。

ですが、日本のような、英語を日常的に使わない外国語環境では、それは「幻想」です。

——「幻想」、ですか。

日本では、発音や聞き取りの能力を身につけるために、ネイティブから学ぶべきだという「ネイティブ神話」が根強くあります。

ただ、週1、2回の英語を年齢の早い段階で始めたとしても、それだけで発音は良くなりません。ネイティ

ブの授業を受けたか否かが、その後の英語力の差につながらなかったという研究もあります。

最近では、そもそも、ネイティブのような発音を身につける必然性はない、と言われるようになりました。

———どういふことですか。

今の英語教育では、「母語が異なる人たちの共通言語として英語があり、意思疎通できるかを重視する」という考え方が主流です。

英語が母語の人もいれば、第二言語や外国語の人もあります。こゝういふ人たちと対話するのに、必ずしもネイティブのような発音である必要はないのです。

ネイティブが英語教育のプロだとも限りません。「ネイティブ神話」からは、そろそろ卒業しても良いのではないでしようか。

小学生が英語を学ぶ時、大事なこゝ

———英語の習得に大切なことは。

質の良いインプット、つまり汎用(はんよう)性の高い英語のインプットをできるだけ多く得ることです。

教室内で触れる英語の量には限りがあります。外国語環境でインプットを確保するためには、教室外での学習が欠かせません。今はその気になれば、オンライン上のコンテンツを活用して、いくらでも英語に触れることができます。

———4技能(聞く、読む、話す、書く)はどの順序で学ぶべきですか。

小学生では、「聞く」を中心としたインプットに集中すべきです。子どもが好む物語を題材にした「読む」も多少採り入れると良いでしよう。ただ、単語のスペリングの練習はあまりおすすめはしません。

———なぜですか。

「お勉強」になってしまい、つまらないからです。限られた授業時間の中で単語のスペリングを練習するのはもったいない。子どもたちが楽しく、かつ身に付くものが何かを考えたときに、小学校での英語教育では「書く」の優先順位は高くないと考えます。

———単語を覚えたほうが、「聞く」と「読む」の理解が進みませんか。

子どもは、日本語でも見聞きした言葉のすべてを理解はしていません。ニュース番組であれば保護者

に聞くなどして、意味をつかもうとする。ましてや英語はわからない単語があることが「普通」です。それを無理に覚える必要はありません。先生も教えたことすべてを理解させようとせず、「わかったらすごい」と考えて授業をすべきです。

小学校低学年で英語を学び始めた場合に懸念されることは、卒業までに学ぶ意欲が薄れることです。低学年は、コミュニケーションへの抵抗が比較的薄い。そこを生かし、ゲームなどの活動を楽しむ授業が多い。

ただ、高学年でも低学年と同じような教え方だと逆に意欲を下げってしまう。子どもの発達レベルに合わせた知的な刺激を提供し続けることが必要です。

——文法はいつごろから学ぶべきですか。

文法は中学校に上がってから系統的に学ぶ方が効率的です。

例えば、三単現(三人称単数現在形)の「s」はルールとしては明快ですが、小学生に説明するのは実は難しい。一人称、二人称という概念自体を理解することが難しい時期だからです。小学生のときはインプットを重ねる中で、「She speak」と聞くとなんか変だな、という感覚が持てれば十分です。その上で中学校の先生が三単現の「s」の説明をするとスッと理解できます。

——子どもに早くから英語を学ばせる場合には、どんなことに気をつけると良いですか。

外国語の習得は長丁場です。そのため、英語を学び続ける動機の維持が最も重要になります。

そのためには、子どもたちが自ら英語に触れたいと思える環境作りが大切です。好きなアニメやゲーム、音楽、スポーツでも何でも良い。その子が興味を持ってインプットを続けたいと思えるテーマに英語で触れ、結果的にインプットが増えている、というようにできると良いですね。(聞き手・篠健一郎)

□ コメントプラス

[いま注目のコメントを見る](#) >



蟹江 憲史 (慶應義塾大学大学院教授) 2023年2月15日10時31分 投稿

【視点】 この記事を読みながら大きくなってきました。英語よりも大事なのはコミュニケーションであって、言葉はあくまで手段でしかないと思います。

昔、学生時代に住んでいた寮の寮母さんと寮生とで海外に行ったことがありました。周りが英語を考えてしどろもどろしている中、英語を話さずとも一番上手に、楽しく、現地の方とコミュニケーションをとっていたのは、その寮母さんでした。

国連に行ったりすると、色々な訛りの英語が聞こえてきます。大事なものは、伝えたいことがあり、そ

れを表現する事。テクニックや文法はそのあとでいいと思います。

そうすると、テストの評価方法も、細かい点より相手の言いたいことを理解しているかどうかを問うように、変化してくるのではないのでしょうか。

NEW

♡ 17

f

🐦



おおたとしまさ(教育ジャーナリスト) 2023年2月15日20時41分 投稿

【視点】 各界の最前線で活躍する学者やパフォーマーが、最先端の知見を短時間でプレゼンテーションする動画を毎日配信しているTEDというインターネットサービスがある。ときどき英語のリスニングの練習を兼ねて私も観る。

そこで観た、いかに言語が人間の思考を形づくるかというテーマは非常に面白かった。アメリカの認知科学者レラ・ボロディッキーのプレゼンだ。

左右の概念をもたず常に東西南北で方向を表す言語を話すひとたちは方向感覚が鋭敏になる。「橋」を女性名詞として扱うドイツ語では「橋」に「美しい」「優雅」などの女性的な形容詞が付きやすいが、「橋」を男性名詞として扱うスペイン語では「強い」「長い」など男性的な形容詞が使われやすい。腕を骨折すると、英語では、「I broke my arm.」というが、大方の言語で「私は自分の腕を折った」と言えば、気でも狂ったのかと思われる。

私にも覚えがある。中学生のころ、「May I have a fork.」という文章を学んだ。衝撃だった。日本語では「フォークをください」と言う。日本語では相手と自分をつなぐ「くれる」という動詞が使われる。しかし英語の文には、相手の存在がない。どんな手段であれ、最終的に自分がフォークを手にしていればいいのだ。

最後にボロディッキー博士は言う。「これは自問する機会を与えてくれるでしょう」。「なぜ自分はこんな考え方をするのか?」「どうすれば違った考え方ができるだろう?」。自分の言語を他の言語と比較することで、自分の思考を知り、変えることもできるというのだ。

外国語を学ぶいちばんの価値もここにあると私は思う。

論理的に外国語を学ぶことで、無意識で扱えてしまっていた母国語が相対化される。すると母国語を思考のツールとして意識的に使いこなせるようになる。丁寧に論理的に思考を言葉にしていく作業を重ねると、自分でも思いもよらなかった概念的発見ができることがある。思考の次元が変わる。

これは「感覚的」にコミュニケーションツールとしての外国語を「習得」することでは得られないメリット。バイリンガル教育をするのはいいけれど、その場合、論理的思考ができるようになる12歳前後から第2外国語を「論理的」に「学ぶ」機会を設けたほうがいい。

アメリカの国務省によれば、日本に赴任する駐在員が日常会話レベルの日本語をマスターするまで約2760時間を要するという。英語に近い言語なら約480時間でいい。それだけ英語と日本語はかけ離れている。学べばそれだけ思考が広がる。

この効果を得るために、なにもペラペラになるまで外国語をマスターする必要はない。学べば学んだ分だけ、思考は広がる。それは自分の内なる宇宙を広げることだといってもいいし、宇宙を観る解像度を上げることだといってもいい。

この効果に比べれば、日常会話程度の外国語が話せることなどさほどの価値もない。特にビジネスの上での意思伝達ツールとしての語学力は、近い将来、まったく違和感なくリアルタイムに同時通訳してくれる自動通訳機にとって代わられるだろう。そのために約2760時間を費やすくらいなら、日本語でいいからいろいろなひとと話して、いろいろな冒険をするといいい。さらに宇宙を見る目が広がる。

いま、日本の英語教育も変わろうとしている。「4技能」「使える英語」の「習得」を重視しようという方向性だ。せっかく勉強するのだから話せるようになりたいのは当然だ。しかし英語を話せるように「習得」することばかりに重点を置きすぎて、英語を外国語として論理的に「学ぶ」ことをおろそかにすると、おろらく私たちの思考力も日本語力も低下する。

かつてゲーテは言った。「外国語を一つも知らない者は、母語をも本当には知らない」。

以下、拙著『正解がない時代の親たちへ』より抜粋。

「英語はツールにすぎない」とよくいわれます。ビジネスの観点でいえばたしかにそうです。しかし学校で英語を学ぶことには、ビジネスに必要なツールを手に入れる以上のメタ(上位概念的)な意味があります。ロシアの心理学者ヴィゴツキーによる、発達概念を引いてみましょう。

”子どもが科学的概念を習得し、それを自覚し得るためには、生活的概念の発達が一定の水準にまで達していることが必要です。いわば下から上への長い歴史を歩んだ生活的概念は、科学的概念の下への成長の道をあらかじめ踏均すのです。(中略)

これと同じような関係が、外国語の習得と母語の発達のあいだにも見られます。母語の発達が言葉の自然発生的な利用からはじまり、言語形式の自覚とマスターで終わるとすれば、外国語の発達は、言語の自覚とその随意的な使用からはじまり、自由な自然発生的な会話に最後に到達します。”(柴田義松『ヴィゴツキー入門』より)

NEW



1





ハグスタ [→](#)

HUG STA(ハグスタ)は、子育て世代に開いたニューススタンドです。[\[記事一覧へ\]](#)

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.